

# 中国語外国研修を通じて見る学生の意識変化と異文化理解について

—— 青島大学における外国研修の成果と課題 ——

馬 叢 慧

## 目次

1. はじめに
2. 下関市立大学の外国研修について
  - (1) 中国語外国研修について
  - (2) 青島大学とのつながり
3. 青島大学における外国研修について
  - (1) 研修までの流れ
  - (2) 研修プログラム
4. レポートに見る学生の意識変化
  - (1) 研修前の目的・意識
  - (2) 研修中の様子
  - (3) 研修を通じての意識変化
  - (4) 異文化理解へ
5. 課題と展開
6. 終わりに

## 1. はじめに

近年、急速に社会のグローバル化が進展する中、『一般社団法人海外留学協議会 (JAOS) による日本人留学生数調査 2018』<sup>1</sup>によると、2017年にJAOS加盟の留学事業者38社から海外に留学した日本人は約7万8千人で、そのうち大学のプログラムによる外国研修や語学研修などを含む、3ヶ月未満の短期の語学留学は約半数の55.9%で、現在留学の主流となっていることがうかがえる。

こうした背景の中、2017年に筆者は下関市立大学の学生29名を夏季休業期間、外国研修として中国の青島大学に引率した。学生達は青島に2週間滞在し、午前は青島大学の中国語の授業に出席、午後は青島大学日本語学科の学生との交流や青島市内の視察など、現地の生活や文化に触れながら、現地の中国人とのコミュニケーションを通じて実践的な中国語の習得に努めた。

本稿は、2017年度の研修プログラムと研修後に学生が作成したレポートをもとに、中国語外国研修が

学生の意識変化と異文化理解に、どのような影響をもたらしたか。また明らかとなった課題をどのように改善すべきかを分析し、今年(2019年)に実施する青島大学における中国語外国研修及び今後の外国研修に寄与することを試みたい。

## 2. 下関市立大学の外国研修について

下関市立大学では、全学科共通の教育課程として、「基礎教育」「教養教育」「演習」「キャリア教育」「自発学習科目」「副専攻」などがある。この中で「基礎教育」は、「外国語」「国際コミュニケーション」「情報・数理」「健康・スポーツ科学」の4分野から構成されており、さらに「外国語」の教育においては、第1外国語として「英語」「中国語」「朝鮮語」から選択、履修できることが本大学の特徴の1つと言える。

本稿における「外国研修」は、「基礎教育」内の「国際コミュニケーション」の一部として位置付けられており、海外の友好交流協定校などを中心に、英語圏(アメリカ・イギリス・カナダ・オーストラリアなど)、中国、台湾、韓国に短期の語学研修に行き、学生の語学力の向上や異文化理解を目指すものである。<sup>2</sup>

なお、本大学においては、日本人の海外留学者数が増加傾向となり約5万人となった<sup>3</sup>、1994年から外国研修を実施しており、日本国内でも比較的早い段階から海外への短期研修を課程に取り組んでいた大学であると言える。

### (1) 中国語外国研修について

現在本大学では、中国語圏では中国の青島大学と北京大学、台湾の銘傳大学と国立聯合大学の4大学と友好交流協定を結んでいる。近年、中国語を第1

表1 中国語外国研修 参加者数の推移

実施年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
研修先大学	－	北京大学	－	青島大学	－	青島大学	銘傳大学	青島大学	銘傳大学
参加者数	－	8名	－	6名	－	10名	24名	29名	30名

出典：下関市立大学「国際交流白書」

外国語として履修する学生にとっては、2週間という短期間であっても現地で生の中国語に触れることができる中国語外国研修は非常に好評で、2016年以降は20名を超える学生が参加している。

2010年以降の中国語外国研修の参加者数の推移は表1の通りである。

なお、2010年、2012年、2014年で中国語外国研修が開講されなかった要因については、秋山淳(2017)は「中国語の履修を希望する学生が少なかったことと、重症急性呼吸器症候群(SARS(サーズ))などが原因」としている。2015年以降は、中国語外国研修の参加者数の増加が顕著であり、2016年には20名を超え、2017年には30名に迫り、2018年には定員の30名に達している。<sup>4</sup>

研修先の大学は、2011年は北京大学であったが、それ以降は青島大学か銘傳大学で実施している。特に2015年以降は、原則として両大学を毎年相互に研修先の大学に固定し、外国研修を行っている。これにより、参加学生には同じ中国語圏であっても、大陸と台湾との多様な中華圏文化の体験を可能にするとともに、研修先の大学との継続的かつ安定的な友好関係を築くことを目的としている。

## (2) 青島大学とのつながり

まず、本大学のある下関市は、現在5都市<sup>5</sup>と姉妹・友好都市の盟約を締結しており、青島市とは1979年10月3日、下関市で友好都市の調印を締結した。なお、本年(2019年)は両市の友好都市締結40周年の記念すべき年にあたり、周年行事も予定されている。

そのような中、下関市立大学と青島大学とは1989年に友好交流協定を締結して、2009年には20周年記念式典を開催、本年(2019年)には友好交流30周年を迎える。両大学は長い友好関係の歴史があり、共同研究や、教員派遣<sup>6</sup>、交換留学、短期研修など盛んに行われてきた。

なお、現在の青島大学は1993年に青島大学を含

む4つの学校が合併したものであり、学生総数は約4万6千人で、3つのキャンパスを持つ公立総合大学である。本研修は青島市中心部に位置する青島大学浮山キャンパスにある「国際教育学院」(外国人留学生の教育機関)で行われている。

## 3. 青島大学における外国研修について

本大学における青島大学での外国研修は、主に説明会2回、参加申込、オリエンテーション2回、そして現地研修と研修後のレポート提出の流れとなっている。これらの一連のフローは本大学の国際交流センターと連携し進めているが、同じく外国研修を実施する英語、朝鮮語とは回数や内容など進め方が異なっている。これは、各言語がこれまで実施した研修の中で最適な進め方を模索してきたものと言える。

### (1) 研修までの流れ<sup>7</sup>

まず、中国語外国研修の説明会は、全学年の学生を対象に自由参加できるものであり、幅広く学生の参加が見込めるよう、日を変えて全2回行っている。説明は該当年度の研修引率教員が担当し、主に研修期間、現地プログラム、費用、補助金<sup>8</sup>、宿泊施設、青島市の概況などについて紹介し、同時に旅行会社がパスポートやビザの申請、航空券購入などの一連の流れを説明し<sup>9</sup>、前回の外国研修で青島大学で学んだ参加学生から体験談を聞く時間も設けている。

この体験談は、現地での研修内容を聞くだけでなく、海外渡航の経験も無い学生にとっては、同世代の感覚に近い学生の体験を見聞きすることは、数少ない生きた情報であり、研修への参加を決定する重要な要因になりうると考えている。

したがって、体験談を紹介する学生には、学習環境や生活環境だけでなく、どのような異文化との交流・体験が行えるか、そして参加してどのように自分が変わったかなどについて、写真や動画を交えつ

つ、学生自身の言葉で語りかけてもらうように配慮している。

説明会から申し込みを開始し、申込期間は1か月程度としている。

研修参加者の決定後は、参加者を対象としたオリエンテーションを2回開催する。1回目は、引率する教員が、出発までの流れ、中国の社会・文化・習慣などを説明し、滞在宿舎(2人部屋)の部屋割、さらに1グループ5～6人で計5グループに分けた。

このグループ分けは2017年の中国語研修において初めての取組であった。当初は引率教員1名で学生を引率する負担を軽減する為に講じたグループ管理の手法であり、現地でのグループへの連絡については、各グループのリーダー(立候補制)を通じて、グループごとに点呼や所在確認を行った。<sup>10</sup>別の側面では、参加学生相互がコミュニケーションを取ることで、現地での情報交換や行動をグループ単位で行うことを促し、さらにはグループの自発的な取組を尊重する観点で取り入れた。

2回目の説明会では、研修に持参する物、現地のインターネット事情、中国現地で使う連絡方法など、より具体的な内容について説明を行った。現地での連絡手段について、インターネット環境は学校・宿舎に整備されているため、学校外でも確実に連絡が取れるようにwifiルーター、プリペイドsimなどを1～数名でシェアするように、旅行会社を通じて手配した。

コミュニケーションツールとしては、中国の代表的なSNS<sup>11</sup>アプリ「微信(we chat)」を各自のスマートフォンにインストールさせ、「全体用」「グループ用」の二つのグループチャットを作成し、連絡や確認などによって使い分けを行った。

## (2) 研修プログラム

2017年度の中国語外国研修は、2017年9月10日～23日に実施し、主なプログラムは「語学学習」「文化体験」「中日交流会」「市内・崂山<sup>12</sup>観光」で構成された。現地での具体的なプログラムは、表2の通りである。

表2 2017年中国語外国研修プログラム

期間	時刻	内容
9月10日(日)	出国、青島到着	
9月11日(月)	9:30~10:30	開校式
	10:30~12:20	クラス分け 中国語の授業
	12:20~	フリー(銀行にて換金、 ショッピング)
9月12日(火)	8:30~12:20	中国語の授業
	12:30~13:30	歓迎宴会
	13:30~	フリー(青島市内散策)
9月13日(水)	8:30~12:20	中国語の授業
	13:30~15:00	文化体験授業(中国カンファ)
9月14日(木)	8:30~12:20	中国語の授業
	14:00~16:00	中日交流会
9月15日(金)	8:30~12:20	中国語の授業
	13:30~17:00	崂山観光
9月16日(土)	自由行動	
9月17日(日)	自由行動	
9月18日(月)	8:30~12:20	中国語の授業
	14:00~16:30	青島市内観光
9月19日(火)	8:30~12:20	中国語の授業
	12:20~	フリー(青島市内散策)
9月20日(水)	8:30~12:20	中国語の授業
	13:30~15:00	文化体験授業(中国カンファ、舞龍など)
9月21日(木)	8:30~12:20	中国語の授業
	12:20~	フリー(ショッピングなど)
9月22日(金)	8:30~10:20	中国語の授業
	13:30~15:30	文化体験授業(小麦粘土細工)
	16:00~17:00	終業式
9月23日(土)	帰国	

### ①語学学習

語学学習については、研修前に単独のクラスを作るか、あるいは既存の中国語のクラスに編入するかのいずれかが選べたが、様々な出身国の留学生とのコミュニケーションの機会が得られ、国際的な視野を広げることで異文化理解に役立つという観点から後者を選んだ。青島大学に到着後、参加学生の中国語レベルによって、国際教育学院の語学留学生として「初級クラス」と「初中級クラス」とに編入することとした。

授業時間は、出入国の2日間と土曜・日曜を除く、月曜日から金曜日までの8:30から12:20まで、1コマ50分の計40コマである。授業内容は、編入クラスによって異なるものの、主に総合中国語、リーディング、スピーキング、リスニングなどで構成されている。参加学生はアメリカやドイツなど、様々な国からの留学生と同じクラスで中国語を学ぶことで、非常に良い刺激となり、語学学習に対する意欲の向上のみならず、異文化コミュニケーションにおける意識の芽生えが見られた。

事後レポートに基づく具体的な分析については、次章で詳しく述べたい。

## ②文化体験

文化体験は、授業の無い午後の自由時間に期間中3回実施された。中国カンフー、変臉<sup>13</sup>、太鼓、舞龍<sup>14</sup>の体験授業（全員参加）が2回、小麦粉粘土細工の伝統文化の体験授業（自由参加）が1回であった。青島大学での外国研修においてこのような文化体験は初めての試みであり、期間内に開講されているプログラムから選択した。

1回目の授業は、主に中国カンフーであり、先生による演武、カンフーの基本動作や構えの練習で構成される。2回目の授業は、カンフーの練習の他、太鼓や舞龍の練習、伝統芸能の変臉を鑑賞し、多彩な体験をした。特に2回目は学生たちも日本ではあまり経験できない中国文化を体験することができ、興味津々の様子であった。

一方で、小麦粉粘土細工の体験は、帰国前日の終業式直前に実施され、学生も帰国準備に追われていた為、残念ながら参加者は少なかった。

## ③中日交流会

中日交流会は、青島大学日本語学科に所属する中国人学生の希望者と、9月14日に行った座談会である。当日は、日本語学科から過去最多となる約60名の学生が参加し、約2時間の交流の中で、学生同士で中国語や日本語を駆使し、様々な話題について交流した。

交流会の終了後も、日本語学科の学生が青島大学のキャンパスを案内したり、一緒に食堂で食事をする光景が見られ、参加学生にとっても貴重な交流の機会となったようである。研修後も連絡を取り合っ

ている学生もいるとのことである。

## ④青島市内・崂山観光

青島市内・崂山観光は、青島大学に提供いただいたバスで、五四広場・帆船競技場・小魚山公園<sup>15</sup>・八大関<sup>16</sup>など、青島市内の名所を回るコースを見学した。また、到着した週の金曜日には、青島大学2017年度外国留学生新入生の崂山登山に全員が参加し、世界各国からの留学生と交流しながら登山を楽しんだ。

## ⑤その他

今回の参加学生は、全員青島大学の留学生寮で基本的に2人1部屋で宿泊した。各部屋にはテレビ、エアコン、電話、wifi、トイレ、シャワー、洗面台が完備されている。食事は1日3食すべて外食で、留学生寮にある食堂も利用できるが、街に外出して様々な料理を体験することが多かった。

## 4. レポートに見る学生の意識変化

2017年度の中国語外国研修では、参加学生に帰国後のレポート提出を課題とした。本章ではレポートをもとに、研修前後で参加学生がどのように意識が変化したかを考察してみたい。なお、参加者29名全員がレポートを提出しているが、任意の様式による記述であった為、記入者により表現に差異が見られる。

### (1) 研修前の目的・意識

まず、レポートから読み取ることのできる研修参加以前の学生の目的や意識について見てみたい。

当然ながら参加目的は、中国語を学ぶ上で外国研修に参加することで何らかのメリットを感じて申し込むものである。それらは主に、中国語能力を向上させたいというもの、国際的人材となることを目指して就職に活かしたいというものである。本大学は中国語専攻の学部学科をもたないが、第1外国語として中国語を履修できる関係から、中国語を将来の就職などに役立てたいという、明確な目的が見られる学生も散見される。

(レポートより引用)

「第一外国語として学んでいる中国語を、中国に実際に行って触れることで、より中国語の理解や知識を深めるとともに、より意欲的に今後の中国語の学習に取り組むことができる（中国語のスキルと意欲の向上）」

「研修に参加した理由は、もともと中国に興味があったことと、就職活動に身を投じる直前により広く新しい視界を切り開きたかったこと、さらに単位の都合が背中を押したこと」

「世界の中心である中国語を習得すれば、就職活動にプラスになり、国際的に活躍できる人材になれる」

「中国語検定の取得も考えていた」

一方、参加前は総じて期待感より不安感など負の感情が圧倒的多数を占めていたことがわかる。これらは参加学生の約半数が1年生であり、これまで中国、あるいは海外旅行に行った経験の無い学生が多かったことも起因するであろう。日本と中国の両国は「一衣帯水」の関係だと言われるが、まだまだ近くて遠い国なのかもしれないと感じさせられる。

ここで注目したいのは、大多数の学生が第1外国語として中国語を履修しているにも関わらず、中国に対して漠然とした「怖い」「反日」という負の感情を抱いていることである。

(レポートより引用)

「行く前は不安の方が大きかった」

「不安と緊張で頭がいっぱいだった」

「生活していけるのか、中国語を使うことができるのかなど数えきれないほどの不安」

「中国のイメージはニュースで見る限りでは怖いというイメージが強かった」

「中国に行くまで、中国に対してなんとなく“怖い”というイメージを抱いていた、正直、中国へ行くのは気が重かった」

「中国は反日のようなイメージ」

筆者自身、平素より授業では、学生が中国の生活・文化などを身近に感じられるように工夫を凝らしてきたつもりではあるが、履修間もない1年生などの意識までは、なかなか変えられなかったようである。

## (2) 研修中の様子

続いて実際に研修に行った際の参加学生の意識についてレポートをもとに考察してみたい。主に「語学学習」、「交流・体験」、「生活」の視点で見えていきたい。

### ① 語学学習

青島大学における語学学習については、教員や学生とも良好な関係が築け、比較的良い学習環境であり、参加学生の意欲を向上させるものであった様子がかがえる。

(レポートより引用)

「青島大学の生徒や先生はとても優しくかった」

「青島大学の方が温かく迎えてくれ少し安心した」

「他の留学生の方にも優しくしてもらい、話したり、サッカーをしたりすることで仲が深まった」

「とても充実していた。授業が午前までなので授業に集中して臨めた」

「以前に比べて聞き取れる中国語の単語が増えた」

「毎日中国語に触れる楽しさや、それに伴うスキルアップを実感できた」

一方、当初は授業に苦勞した様子も見られるが、それに慣れると楽しさや語学力の向上を感じられた学生も見られた。同時に、自分の語学力が不足しており、悔しさを覚えたことで、一層の意欲向上につながった事例も見られ、これらは良い成長の兆しであった。

(レポートより引用)

「授業のレベルが高く、夜遅くまで授業のための宿題や予習をしていた」

「かなり難易度の高いクラスに入れられてしまい、講義はすべて中国語で行われ、リスニングも聞き取ることが大変だった」

「自分なりに mp3 プレイヤーに中国語の教材を入れて聞き続けたりしたのだが、対策むなしく研修中は言語の壁に阻まれた」

「授業の進め方についていくのはとても苦勞したし、何より自分の不勉強さを教えられたような気がして悔しい思いをした」

「リスニング力の重要さを痛感させられた、就職活

動などで中国語を理解しようとしているということ  
をアピールするのであれば、今のうちからリスニングと発音を鍛え、会話を可能にすることを目標にしなければならない」

「徐々に授業の内容が理解できるようになり、最初は苦痛だった授業が段々と楽しくなった」

「青島大学の学生はとても勉強熱心だと感じた、夜遅くまで皆で勉強している所を見て見習わないといけないと思った」

こうした語学学習の中での参加学生の「気づき」が意識の変化へとつながる兆しは、とても大切なものだと感じる。また、大学での学習が中国語を学習する多国籍な学生であったことも、必然的に異文化・多文化に触れる契機となり、学生の異文化理解の点で役立つようである。また、参加学生の声からは、中国語の必要性を感じただけでなく、意外にも中国語で不足する部分を英語で補ったことで、英語の重要性を再認識した点は興味深い事例と思われる。

(レポートより引用)

「多くの国の方がいらっちゃって、その方たちとのコミュニケーションも良い経験、負けたくないなと思ひ、良い刺激」

「同じクラスには色々な国籍の人がいて、授業の中で交流することができた」

「もっと中国語を勉強しなければと、自分の力のなさに悔しい思いもしたが、同時に、公用語の違う様々な国の人達と、日本語以外の言語で意思疎通できる事がどんなに素晴らしいことか、身を以て知ることができた」

「もっと青島に滞在し中国語を学び、その中で英語も話せるように勉強したいと心から思った」

「授業内容の説明は中国語と英語で行われていたので、英語の大切さも感じた」

「海外に行くのに英語は強みになる」

## ②交流・体験

参加学生にとっては、中国語の学習はもちろんのこと、実際にヒトとの交流や、モノ・コトの体験なども強い刺激になったようである。日本にいる際の中国語学習では、テキストを中心に想定できる内容

についての会話練習に終始しがちな為、本当の意味で何かを伝えたいというコミュニケーションの場は外国研修の場などでしか体験できない貴重なものと言える。

こうした交流は国や文化の違いを乗り越える、異文化理解に大いに役立つものであったことがわかる。

(レポートより引用)

「(日本語学科の学生との交流を通じ) 日本語が上手で、私ももっと語学の勉強を頑張らなければ、と強く思ったと同時に強い刺激を受けた。大きな心の支えになった。」

「語学研修で伸びるのは座学ではなく、実際に現地の人と喋ることで得られる中国語で会話する能力」

「言葉の壁を感じることも多々あったが、コミュニケーションの取り方次第で、壁がなくなることもあったので、コミュニケーションの大切さも学べた」

「言葉が伝わらなくてもボディランゲージや筆談など、こちらとコミュニケーションを取ろうという意識が強くあることに驚いた」

「実際に行ってみると、親切な人が多く、言葉をどうにか伝えようとしてくれていたのが伝わってきた」

「現地の言葉をあまり話せなくてもコミュニケーションくらいはとれる。完璧な中国語を話せなくてもジェスチャーと簡単な中国語で思いを伝えることができる」

「完璧に話せなくても何とか伝えたい気持ちさえあればコミュニケーションをとることができたことは、私の中では貴重な体験であり、そのおかげでできた沢山の異国の友達は私の財産である」

「話せないからこそ積極的にコミュニケーションをとろうと試みる姿勢が大切だと学んだ」

## ③生活

日本を離れて青島での2週間あまりの海外生活は、参加学生にとっても大半が初めて経験するものであった。生活面での参加学生の感想は多種多様であるが、研修前に感じていた不安をよそに、好感触であったことは、引率教員としては安堵するものであった。

(レポートより引用)

「青島は住みやすくとても良い街だと思う」  
「食べ物がとても美味しいことに驚いた」  
「物価の安さにとても救われた」  
「日本も中国のようにバスの値段が安くなったらとても暮らしやすくなると思う」  
「現地の方々は自分たちが上手くない中国語で話しても親切に対応や会話をしてくれた」  
「青島の人々の優しさが印象的」  
「実際に行ってみると、イメージは良い意味で覆された」  
「街中で道を尋ねたら親切に教えてくれた」  
「大きな建物が並び、行き交う人や車も多く、想像していた以上に都会だった」  
「必要なものが何でも身近にあって過ごしやすかったが、逆に日本ではどこにでもある自動販売機が少なく不便に感じた」  
「山東省以外の土地や料理への興味が湧いてきた」  
「小籠包や水餃子など、本場の味を知ることができた」  
「中国では、大きいテレビ局は日本について良いことを報道している、と聞いた」  
「中国のスーパーには、日本の化粧品やお菓子も多く売られており、日本の製品の品質の良さは中国で認められているとわかり、とてもうれしかった」  
「中国ではバスに乗っての移動が多かったが、その際に、お年寄りに対して席を譲る中国人を多く見かけた。このような中国の、年上を敬うという文化は本当に素晴らしいと思った」

中国や青島に対する好感度を得られた一方、日本を離れた当初は慣れない環境や文化に対して、驚きや葛藤を感じた記述も見られる。

(レポートより引用)

「3日目くらいまでは、日本との文化や価値観の差や環境面の違いに驚愕してしまい、一瞬帰りたとも考えた」  
「何日かは、中国の文化に慣れることができず、日本に帰りたいと心底思っていたが、少しずつ慣れて、最後は日本に帰りたくないと思った」  
「トイレの文化に驚いた」

### (3) 研修を通じての意識変化

まず、筆者が一番気にしていたのは、研修前に学生が感じていた不安感などのネガティブな感情がどのように変化したかである。レポートからは、この外国研修がきっかけとなり、中国や青島に好印象を覚えたり、ファンになったりする学生が多く見られた。よく「百聞は一見に如かず」と言うが、学生本人が足を運び、時に辛く、時に楽しく学んだ経験は、学生自身の世界を確実に広げたことに気づかされた。

2017年度の参加をきっかけに、2018年度に青島に交換留学に行った学生が1名、同じく台湾への語学研修に参加した学生も8名程度いたことを考えると、青島大学での体験が少なからず影響していたと考えられる。

(レポートより引用)

「中国という国に対するイメージがかなり変わった」  
「中国をより知って、より楽しむためにも中国語をさらに学んでいきたい」  
「中国が大好きになった、今でもふと中国に帰りたと思うことがある」  
「ニュースで見ることだけが真実ではないことがわかった」  
「実際に中国で生活して、街の様子や人々の生活を見ているとイメージは変わった」  
「自分の価値観や考え方が大きく変わった」  
「機会があればまた青島に行きたい」  
「もっと色々な国を見に行きたいなという気持ちが強くなった、来年の台湾研修にも参加したい」

また、語学研修が学生個人の意識にも変化を与え、モチベーションの向上につながっていることがレポートから読み取れる。

(レポートより引用)

「普段とは違って、外から日本を見たり、いつもと異なった環境で生活することで、日本の良いところや悪いところを知り、自分の考えや態度など、成長させることができた」  
「経験を、これからの言語学習のモチベーションに変えて、一層努力していきたい」  
「新たな目標もでき、世界共通語である英語を流暢

「に使い他国の人とコミュニケーションをとること、国際関係の職業も目指したい」

「自分も誰とでも気兼ねなくコミュニケーションがとれる気さくな人間になりたい」

「来年台湾に行くのであれば授業についていける程度の中国語を身に着けたい」

「この経験を、今後の中国語検定の取得や就活にも活かしていきたい」

「今後の中国語の学習にしっかりと生かし、語学力をより向上させるとともに、外国に触れる機会があれば積極的に参加していきたい」

#### (4) 異文化理解へ

今回の中国語外国研修を経て、参加学生の中には、中国に関する理解が急速に進んだことは間違いないが、同時に国や文化の違いに注目し、異文化理解の意識が芽生えつつあることがレポートより読み取れた。

(レポートより引用)

「文化の違いや生活の違いなどの新たな発見もあり、とても面白かった」

「日本では当たり前だったことが中国では違っていたり、と今までに味わったことのない多くの経験を得られた」

「文化の違いなのだと思えることができた。自分の慣れ親しんだ文化と違うからと言って、理解しようとしなかったり、怖がったりするのは間違っている。しかし同時に、実際に現地に赴き、その様子を目の当たりにしなければそのことを実感できなかったという事実、文化の違いという壁の高さを感じた」

#### 5. 課題と展開

これまで見てきたように、2017年の中国語外国研修は、過去最多規模の参加学生でもあり、事前説明や引率にはかなりの労力を要した。

一方、研修を受入する青島大学側も、機構改革等で担当部署の改編があり担当者も経験が無かったこともあり、事前の受入調整には相当苦慮していた様子であった。そのような中で友好交流協定校として、多数の学生の受入にも関わらず親身に対応いただけ

たことに大変感謝している。

上述の通り、外国研修を通じて参加学生には確実に意識変化を見ることができた。研修終了後の詳細なフォローアップまではしていないが、中国語の語学試験を受験するモチベーションに繋がった学生もいるし、翌年度の台湾での中国語外国研修に参加した学生も8名程度いた。

引率教員の立場から見ても、研修前後では参加学生の授業に臨む姿勢は確実に良い方向に変化したという実感がある。

中国語の教育者の立場としては、研修への参加の有無に関わらず、学生には一定水準の授業をなすべきであるが、外国研修にも参加し、成績顕著な学生に対しては、次のステップにつながるような課題・テーマを与えることにしたい。

本研修を通じて、また参加学生のレポート内容を踏まえて、今後の中国語外国研修に対する課題として感じたのは以下の4点である。

①中国語学習の期間に個人差はあるものの、中国や海外に旅行した経験が無い中で、負のイメージの先入観が強すぎる傾向にある。外国研修によってそれらを払拭することのできた学生もいるが、まだまだ中国語の履修や研修に躊躇する学生が多い。今後はこうした先入観を緩和できるような情報も提供しつつ、身近な国、身近な言語として感じてもらえるようにしたい。

なお、外国研修に先立っては、研修先の雰囲気を感じやすいように視聴覚機器等も用いながら、さらに創意工夫を凝らすことが求められる。

②先述の通り2017年は青島大学側が外国研修の受入に不慣れな点が多く感じられた。研修内容についても引率教員と青島大学の担当者と十二分に打ち合わせを行っていたが、現地に到着すると想定外の展開であったことも多々あった。完璧な事前調整は期待できないが、適宜情報交換をすることで、30名近い参加学生を困らせることが無いように十分配慮したい。

③本稿は、参加学生の課題レポートをもとに中国語



外国研修の振り返りを行ったものであるが、レポートが自由記述であったため、各自の意識変化に重点を置いた絶対評価的な要素が大きい。

今後は、より分析しやすいアンケート項目の設定も考えたい。同時に参加学生が一同に会しての意見交換会なども設定することで、該当年度の取組の検証や、翌年度の外国研修への課題提起に結びつけたいと思う。

④青島大学での中国語外国研修では、中国に限らず多くの外国人と交流する機会に恵まれ、参加学生は中国のみならず、広く異文化を理解するきっかけとなったことは大変意義のあることだと思われる。別の一面では、中国における自分のあり方を大切にしている学生は多かったが、例えば日本国内に外国人がいる場合に、外国人の立場に成り代わってみる意識が必要かと思われる。

昨今、在住外国人が増加傾向にある日本では、外国人とともに地域づくりを行う「多文化共生社会」の意識が大切となってくる。今回のレポートでは、外国研修を通じて、本大学や下関市での外国人との交流や地域貢献について触れる学生は、ごくわずかであった。今後は多文化共生の観点も持ち合わせた国際人となることを期待する。

なお、本年（2019年）は2年ぶりに青島大学で中国語外国研修が行われる予定である。現時点では過去最多に並ぶ30名近い学生が参加を予定しており、ここ数年の中国語学習に対する強い意識がうかがえる。

今回は一昨年手法も踏まえつつ、これまで述べてきた課題に取り組みながら、参加学生の満足度向上、より実りある外国研修となるよう努めたい。

## 6. 終わりに

以上、本稿では2017年度の中国語外国研修の取組内容を紹介するとともに、レポートを通じて明らかとなった参加学生の意識の変化について考察してきた。研修前は第1外国語として中国語を履修しているにも関わらず、中国に対する不安感が大半の学生に見られた。その一方で研修を通じて、中国や青島について次第に慣れていき、強い愛着をもつ学生

も多数見られた。このような背景には、語学学習に苦勞しながらも日々の達成感から上達する楽しさを味わうことや、多国籍な留学生と中国語を通じてたくさんコミュニケーションを取れたことに要因があると思われる。

外国研修は、より多くの学生が参加することで、参加学生の意識がうかがえるものであるが、筆者としては今回のレポートを通じて明らかとなった課題を本年（2019年）の語学研修に反映することで、より社会で中国語を役立てる学生や、語学学習で興味をもち留学に行くことを選ぶ学生にも増えてもらいたいと思う。

### (注)

- 1 <http://www.jaos.or.jp/newsrelease/2018>
- 2 『2019年度下関市立大学学生便覧』2019年4月 P26-27
- 3 文部科学省「日本人の海外留学者数」調査より
- 4 2019年に実施する外国研修A（中国語）の申請者数は30名（2019年5月末時点）
- 5 中国 青島市、韓国 釜山広域市、ブラジル サン투스市、トルコ イスタンブール市、アメリカ ピッツバーグ市
- 6 現在は、青島大学から下関市立大学に毎年1名の教員が派遣されている
- 7 本稿では主に2017年度の研修に基づき紹介している
- 8 本大学では国際交流基金より補助金として、参加学生1名につき3万円支給される
- 9 2015年度の外国研修教員の提案により、航空券の手配などは旅行会社委託となった。秋山淳「下関市立大学における外国研修とその教育的効果—中国語を例として」『地域の持続可能性—下関からの発信—』P195
- 10 実際には30名近い学生に、大小様々なアクシデントが日々発生するので、引率者としては個別対応に右往左往する状況であった
- 11 ソーシャル・ネットワーク・サービス
- 12 崂山（ろうざん）は青島市内でも有数の観光地で、登山スポットとして有名
- 13 変臉（へんれん）は、中国四川省の伝統芸能の1つで、顔につけた面を瞬時に別の面に変える早業で有名。面は色や描き方で変化させ喜怒哀楽の表情を表現する
- 14 中国伝統芸能の一つで、布で作った龍の模型を多数の人で揚げ、音楽や太鼓のリズムに乗って、龍が玉を追いかける踊り
- 15 ドイツ統治時代の建物を見渡すことができる場所
- 16 ドイツ統治時代の代表建築

### 参考文献

秋山淳「下関市立大学における外国研修とその教育的効果—中国語を例として」『地域の持続可能性—下関から

の発信一』2017年3月

下関市立大学『2017年度学生便覧』

下関市立大学『2019年度学生便覧』

下関市立大学国際交流センター『2015年度下関市立大学  
国際交流白書』（下関市立大学における国際交流の実  
情について）

下関市立大学国際交流センター『2016年度下関市立大学  
国際交流白書』（下関市立大学における国際交流の実  
情について）

下関市立大学国際交流センター『2017年度下関市立大学  
国際交流白書』（下関市立大学における国際交流の実  
情について）